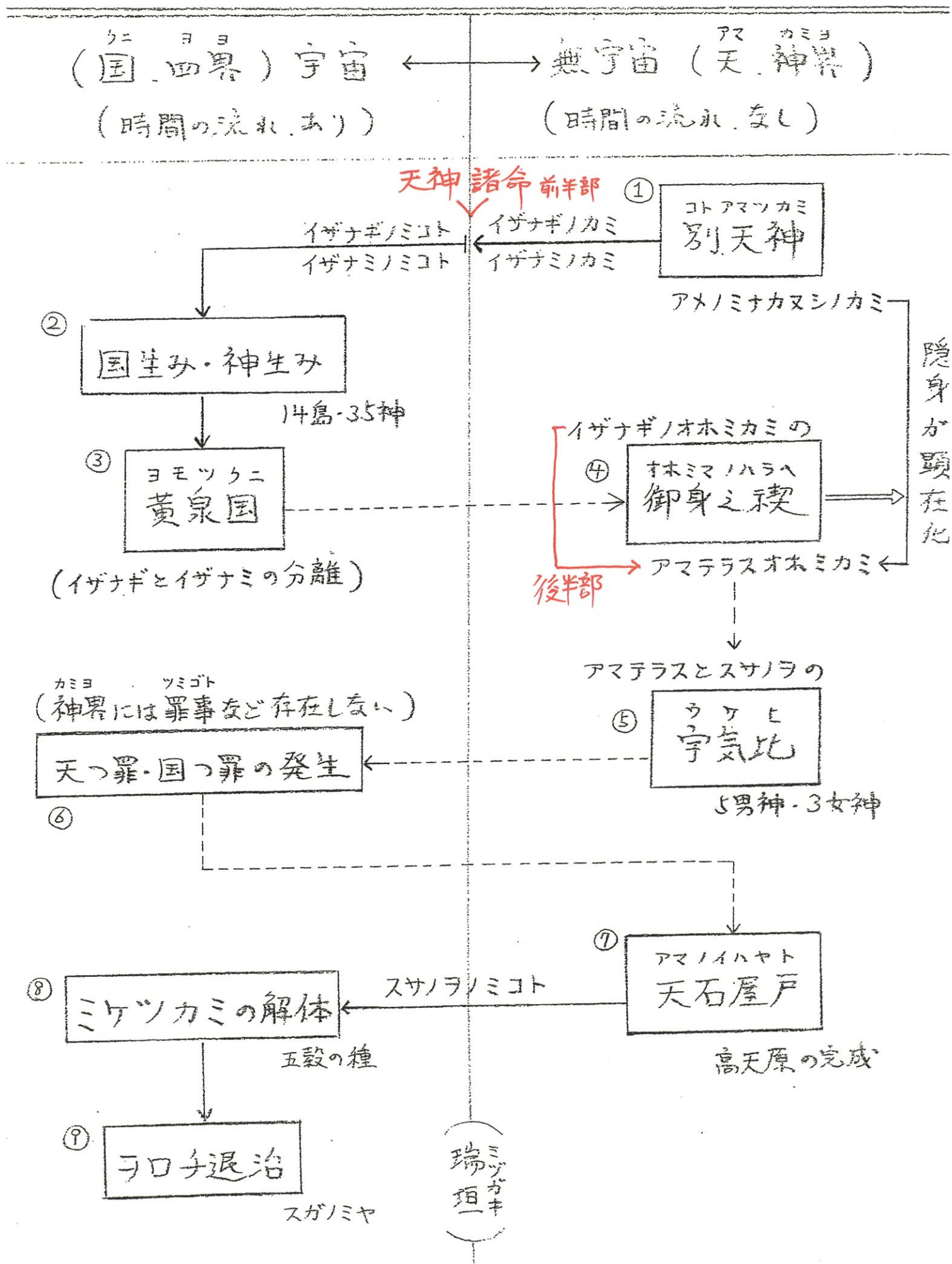


図表：古事記の神話の前半部の構成



言霊の事

日本神道・禊の教典

多田雄三

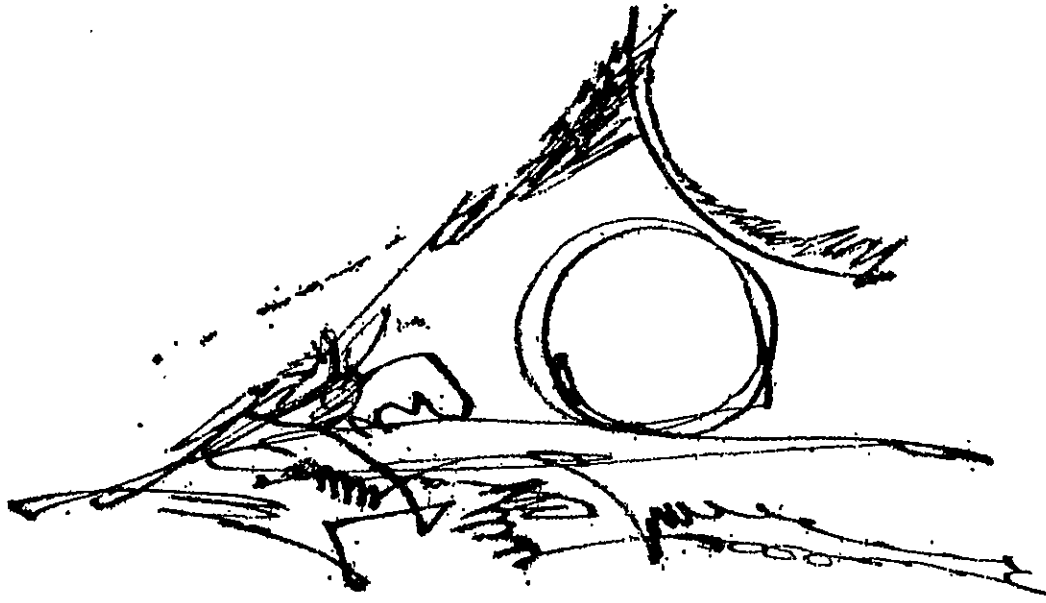
高天原の主たる神を天照大御神と称へまつるので、人の世にては聖人であり、仰ぎ見る天界にては太陽であり、人の身には直日である。直日のみの人が在るのでもなく、聖人のみの世界が在るのでもなく、太陽の如き光のみの天界が在るのでもない。けれども、人として直日を知り、聖人を知り太陽を知るからには、直日の如く聖人の如く太陽の如く、光充ちたる身となり光充ちたる世界と成さんことを念願とし目的とすべきである。

人は其の心の千態万様な如く、千態万様の物を作り事を成し得ようとも、我等は神の如く太陽の如く聖人の如く直日の如く、完全円満なる人と成り世と成さんことを目的として事を成し物を作るべきである。

之れに依つて、作歌の目的も、完全なる人となり完全なる人生を営み此の世を神の世界と成すに存することが自明瞭である。従つて其の作られたる歌詞は完全なる独立躰でなければならぬ。

完全なる独立躰を国常立尊と日本の古典には記してある。それは「天成り地定りたる時に出生れたる神聖」で、「純男である」と日本書紀に説明が加へてある。擾乱の平定された時で、風波の鎮静まつた時で、病患無き健康躰で、天之御中主神と等しき御相を顕された存在であると云ふやうな意味だから、完成された箇躰で、光である。之れを昔から各民族が○と書いて、太陽神を讃美するのに用ゐて居る。人類世界で最尊く仰がるのは太陽であるから、完全円満の御相を太陽に求めて朝に夕に信仰の誠を捧げ来つたのである。

此の光である国常立尊と此の身を作り固め此の国を築き成し其の事業を完成せよと、神代の神の教へ給ふ御詞が歌詞として人の世に伝へられた神言で、之れを「言霊」と讃へまつるのである。「しきしまの、やまとのくには、ことたまの、さちあるくに」と伝へて来たのは此の故で、詞として仰ぎまつる神が言霊なので、或学者等の如く、詞には魂が有るから言霊だとか、此の詞が微妙な活用を有るので言霊だなどと云ふ意味ではない。



悉達多太子の悟證は、虚空藏菩薩の妙智であると云ふから、一圓光明の○であつて、人間身としては、唯一絶對と感ずる極樂淨土である。日本神道は、傳へて之を、高天原と稱へまつるので、天照皇大御神の統治したまふところである。固より、二柱御祖神の言依ざし給ふところで、兼ねて、夜食國と、海原とを統治し給ふことは、

改めて説くまでもないのである。

その状態を假に圖示すれば如此である。

中心の圓相は、之和魂にして、天照皇大御神と稱へまつり、その下より升りて、時に、天照皇大御神をも凌ぎたまふは、荒身魂にして、建速須佐之男命と稱へまつり、下より下に一環連係するものは、月夜見・月弓・月讀命と稱へて、眞身魂・幸身魂・奇身魂の神にてましますと共に、時に術魂と成りて、風波擾亂の慘劇を演ず。

秋風の、早くも訪へば、襖せし、

渾河のあたり、柳黄ばめり。

と、古老の嘆じたる、人間世界の實際である。

此のやうなわけで、

高天原たる極樂淨土は、一圓相で、神言靈であると共に、其の反對の面が存る。

否。

古事記の記載は、一見まことに複雑ではあるが、

第一章は、別天神の神界記であるから、之を數理觀から言へば、最初に一を教へ、その一は、三から成り立つて居り、その三は、經と緯との二であるからとて、時間と空間とを現し來る本體としての零を知らしめたのである。

第二章は、宇宙成壞の垂示であるから、時間と空間との二つが一つになつては十で、その十が別れては、破壊と呼ぶところの死で、その死も結び來れば、建設と呼ぶところの生で、成で、此のやうな變化は、二、三、四、五、六、七、八、九と稱するので、その成り餘れる三、五、七、九の四と、成り合はざる、二、四、六、八の四との合ひては、八である。此の八に依つて、宇宙の萬有は制御せられ整理せられて平衡を保つことが出来るのである。

第三章は、高天原築成の祕儀である。之をミソギと呼んで、三十神界の生滅起伏である。

第四章は、罪惡觀で、數の分散である。

第五章は、高天原開闢記で、三十六の聚散離合である。

第六章は、罪惡觀の第二で、復活の垂示である。五の百倍と、百の百倍と、千の千倍との九である。と云ふと、ひどく普通學には遠ざかるが、神界の事理が複雑なのであるから、祖神垂示の數理觀は懇切丁寧であつても、之を理解することは、まことに容易ではない。で、以下之を省略することとしよう。

第七章は、中心觀で、箇體成立の原理に立脚して、國家觀を教へ、特に日本建國の精神を明にされたのである。

第八章は、綿津見宮と日少宮、産土神と鎮守神との關係を説示したのであり、

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神徳^{ミハクラキ}は、そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神徳は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾^ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

2019.10.22. (火)

幸265頁の説明

第一章 古事記 51頁 「別天神五柱」

(実際には 七柱目までがコアマツカミ、
零と一ニミについて述べたもの。)

第二章 “ 「神世七代」

(十柱神の構成について述べたもの。)

第三章 古事記 53～61頁 「伊邪那岐命と伊邪那美命」
1～4.

(国生み・神生みの神話は、
高天原の築成を表現したもの。)

第四章 古事記 61～67頁 「同」 5-6.

(ヨモツクニの神話は、罪について述べたもの。)

第五章 古事記 69～91頁 (「同」 7～9
「天照大御神と須佐之男命」 全

(9カマノハラの神話は、
36. の集散離合について述べたもの。)

第六章 古事記 91～111頁 「大国主神」 全

(いわゆる出雲神話は、再び罪について
また、復活について述べたもの。)

第七章 古事記 111 ~ 135. (「葦原中国の平定」 全
「瀬々芸命」 全)

(天孫降臨神話は、中心と外郭について、
簡体や国家の成立の原理について、述べたもの、

第八章 古事記 135 ~ 147 「大遠理命」 全 (以上、
上巻あり)

(山幸彦の神話は、綿津見宮が無宇宙のたところ
であることなどについて述べたもの、

第九章 (149-161) (中巻)

・死生解脱の秘 (神武東征の伝説などが
これに相当か?)

第十章 (315-317頁) (下巻)

・神言霊 (「雄略天皇」も葛城山の伝説が
これに相当か??)

「隠された^{ミゾガキ}瑞垣」の発見

古事記の冒頭では、まず五柱の神名を^あ挙げた^{のち}後に、これを『^{こと}別^{あま}天^{かみ}つ神』と説明しており、続けて十二柱の神名を列挙してからこれを『^{あは}并^{かみよ}せて^{ななよ}神世七代と称ふ』と説明している。

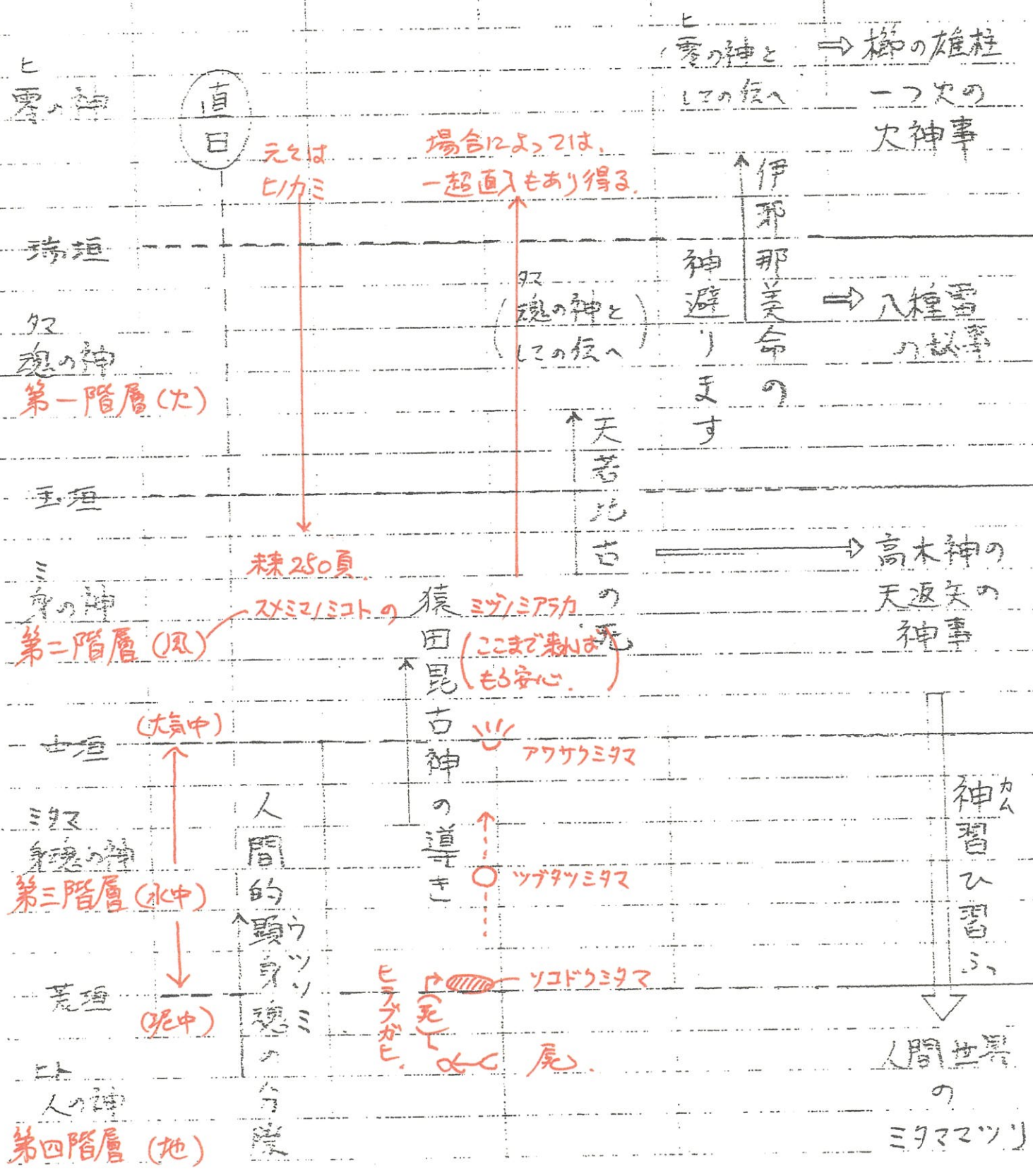
「別天つ神」という言葉の意味から考えて、その直後に名を挙げられている十二柱の神々はみな、当然に(普通の)「天つ神」である。『^{あは}并^{あは}せて』と一括されている以上、順番としては末席となる『^い伊^な邪^な那^の岐^{かみ}神、伊^い邪^な那^な美^の岐^{かみ}神』も、もちろんその例外ではない。

ところが、次の文章では唐突に神名の語尾が変わり、『^{こと}是^{あま}に^{かみ}天^{あは}つ^も神の^{みこと}諸^{みこと}命^も以^もちて、伊^い邪^な那^な岐^{かみ}命、伊^い邪^な那^な美^の岐^{かみ}命、二柱の神に(中略)言^{こと}依^よこし^{たま}賜^{たま}ひま』と書かれている。だが、よくよく考えると、『^{あま}天^{かみ}つ^{あは}神の^も諸^も命^も以^もちて』と言っている以上、この『伊^い邪^な那^な岐^{かみ}命、伊^い邪^な那^な美^の岐^{かみ}命』自身は当然に「天つ神」ではない。「^{こと}別^{こと}天^{こと}つ神」でもなく「天つ神」でもないのだから、この神名は当然に『「^{こと}国^{こと}つ神」としての「イザナギ-イザナミ」』であると解釈すべきである。

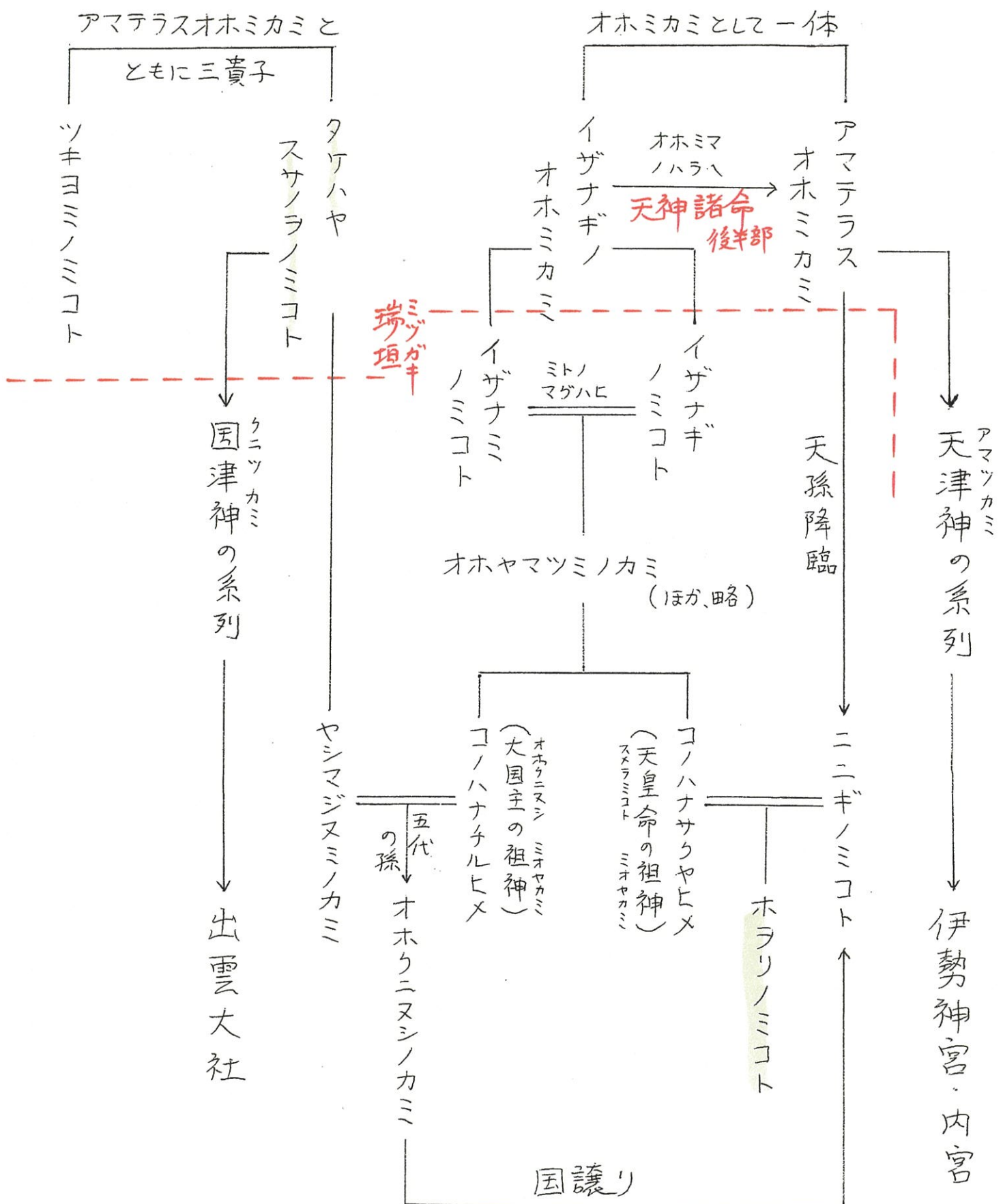
／即ち、ここには「^{ミゾガキ}瑞垣」(無^(アメ)宇宙と宇^(ウニ)宙との境界)の存在が言外に暗示されているのである。

	7 領域	(未来250頁より) 「一貫したるカミ」	古事記の神名
無 宇 宙 の 3 段 階	① 上の段階	(零の神としては) 隠身天之御中主神 (タカミムス⑤ノカミ カミムス⑤ノカミ)	(左記.造化參神)
	② 下の段階	イザナギノオホミカミの オホミマノハラへにより、 カウリミから ウツシオミに変化。	ウマシアシカ⑤ヒコダノカミ 他.三神
	③ タマの段階	(零の神としての) 三貴子	十柱神 (イザナギ・イザナミ.他) 三貴子 (←オホミマノハラへ) 五男神三女神 (←ウケヒ)
ミヅガキ 瑞垣 宇 宙 の 4 階 層	① 第一階層	(魂の神としては) 天照太御神 (ツキヨミノミコト タケハヤスサノラノミコト)	イザナギノミコト・イザナミノミコト 国生み・神生みによる 十四島・三十五神
	② 第二階層	(身の神としては) 皇御孫之命 (イハナガヒメ コノハナサウヤビメ)	(個々の土地における 具体的な鎮守神・産土神) 他.アメノワカヒコ.など。
	③ 第三階層	(人類世界の神としては) オホヤマトスメラギミ (アシハラシコラ ヤヘコトシロヌシ)	(オホクニヌシノカミ や サダビコノカミは.一旦、 ここまで降りて来ている。)
	④ 第四階層	(人間身としての天皇)	

多田流の用語と 古事記神話の解釈	神の類別	月神事 幸19頁 他より	備考
・コトアマツカミの領域 ヒノカミ カミミヤ バウガウエン ・火神の神宮 (莫囂園)	ヒ カミ 零の神	ヒ (零)	ヒ 零
アマテラススメオホミカミ ・境地としての天照皇太御神	(カウリミ コトアマツカミ	ミムスヒ ミ産霊 ミタマ 御霊	↓ ・結ばざる タマノヲ
----- アマノイハヤト ----- ・オホミマノハラへの神話 ・ウケヒの神話	(ウツシオミ アマツカミ	第一魂 根本魂 直日 ニギミタマ (知魂)	↓ ・結び結びたる タマノヲ
----- アマノウキハシ ----- ・勝さびの神話 ・五穀の起源の神話	ミツガキ 瑞垣 タマ カミ 魂の神 タマガキ 玉垣	第二魂 霊 ウシミタマ (奇身魂)	↓ これらがそのまま 宇宙の素材領域 (ヨモツクニ) に 入ると、各々、
----- スガノミヤ ----- ・ヲロチ退治の神話 ・因縁りの神話	ミ カミ 身の神 ナカガキ 中垣	第三魂 念 サキミタマ (幸身魂)	・空零 ・鬼神 ・魂魄 などと呼ばれる。
(出雲神話の前半部)	ミタマ カミ 身魂の神 アラガキ 荒垣	思考 マミタマ (真身魂)	即ち、総じて マガツビの類 である。
-----	ヒ カミ 人の神	身体 アラミタマ (荒身魂)	



神話における、天津神と国津神の対立



(大被祝詞)

(言霊の幸. 34頁より) ほか. 古事記底本 423頁なども参照.

註) 天津神と国津神との区別について.

多田流では、

天津神とは、無宇宙の側に属する諸力・諸実体。

「^ヒ〇が^ヒ〇のままに^{ムスビ}産^{ムスビ}霊^{カミ}産^{カミ}魂たる神」のこと。

国津神とは、宇宙の側に属する諸力・諸実体。

もはや^ヒ〇ではない^ミ⊙を築いた神のこと。

(言霊の幸. 196-197頁ほかを参照)

神話や祝詞では、

天津神とは、^{たかまのはら}高天原(天上の神界)に坐す神々のこと。

国津神とは、^{いづものくに}出雲国など、地上の神界に坐す神々のこと。

(古事記や延喜式祝詞を参照)

一 水上に浮かんだ脂（動物の脂肪）。
 二 海月（かき）のように漂っている時。
 三 葦の芽のように芽を吹き出す。
 三 書紀に「可美葦牙彦舅尊」とある。りっぱな葦の芽の男の神の意で、国土の生長力の神格化。
 四 高天の原に恒久にとどまっている神。
 三 天つ神の中の特別な天つ神。
 六 国土に恒久にとどまっている神。国土の根源神。
 七 書紀には「豊斟淳尊」、「豊国主尊」、「豊組野尊」、「豊国野尊」その他種々の名が見える。名義は未詳であるが、原野の神格化であろう。
 六 小字の「上」は次の「去」と共にシナの四声の平上云入を借用して、「上」はその上の字の発音を上げるし、「去」は下げるしるしである。去は一例のみ。
 九 書紀に「埴土煮尊」とある。泥の神格化。
 三 書紀に「沙土煮尊」とある。砂の神格化。妹は対偶の女性神であることをあらわしている。
 三・三 書紀に「角機尊、活機尊」とある。名義は未詳であるが、クイ（杙・機・櫛）の神格化か。
 三・四 書紀には「大戸之道尊、大戸摩彦尊、大戸摩姫尊」などがあるが、多分居所の神格化であろう。
 三、書紀に「面足尊」とある。顔かたちの完備したことの神格化。
 三 書紀に「惶根尊」を始め種々の名が見える。人間の意識の発生を神格化したものであろう。
 三・六 書紀に「伊弉諾尊、伊弉册尊」とある。互に誘（いざな）い合った男女の神の意であろう。岐は清音キの仮名。

神世七代

一 天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。高の下（四）の天を訓（あめつち）に敬へ。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、並獨神と成り坐（み）して、身を隠したまひき。
 次に國稚（くにわか）く浮（う）きし脂（あぶら）の如くして、久羅下那州多陀用弊流時、葦牙（あしかび）の如く萌（も）え騰（あが）る物に因（よ）りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。此の神の名は（一四と）次に天之常立神。常（あめのとこたち）を訓みてトコと云ひ、立（た）を訓みてタチと云ふ。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。
 上の件（かみ）の五柱の神は、別天（ことあま）つ神。
 次に成れる神の名は、國之常立神。常（くにのとこたち）立（た）を訓むこと亦上の如くせよ。次に豐雲上野神。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。
 次に成れる神の名は、宇比地邇上神、次に妹須比智邇牟神。此の二神の名（一九と）次に角杙神、次に妹活杙神。次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神。此の二神の名も（二四と）次に於母陀流神、次に妹阿夜上訶志古泥神。此の二神の名は（二六と）皆音を以てよ。次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。此の二神の名も亦、音を以てよ。

「虹」と解したが、いずれにもわかに従いがたい。
二 画は攪の意で、かきまわされると。
三 今いうコロコロの擬声語。

三 攪き鳴らして。書紀には「画滄海而」とある。

伊邪那岐命と伊邪那美命

1 国土の修理固成

四 自擬島でひとりでに擬って出来た島の意。この島の所在については諸説があつて明らかでない。

五 柱を見定めて立てる意。書紀に「化作八尋之殿、又化作天柱」とあるから、多分八尋殿とは別に屋外に立てられたものである。
六 大きな家屋。ここは新婚のための婚舎。
七 妻。

八 だんだん出来上つて行つて結局。

九 女陰。書紀に「雌元之処」、「陰元」とある。

2 二神の結婚

三 男根。書紀に「雄元之処」、「陽元」とある。

三 さし入れふさいでの意。交接すること。

三 そうです、それがよいでしょう。

三 「しく」は過去の助動詞「き」の連体形「し」に副詞よりの「く」語尾を添えたもの。統紀宣命第十三詔に「朕に宣りたまひしく」と宣りたまひし大命を」とある。金光明最勝王經の古点参照。

三 婚姻の儀礼として柱を廻る習俗があつたかどうかは明らかでないが、何かの呪的宗教的儀礼として人々が柱を廻る習俗があつたのではあるまいか。

三 「みと」は御所で、ここでは婚姻の場所、「まぐはひ」は目合から転じた交接の意。

上の件の國之常立神以下、伊邪那美神以前を、并せて神世七代と稱ふ。上の二柱の獨神は、各一代と云ふ。次に變へる十神は、各二神を合せて一代と云ふ。

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多陀用弊流國を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たし立を訓みてタシと云ふ。て、其の沼矛を指し下ろして畫きたまへば、鹽許々袁々呂々邇音を以るよ。畫き鳴し鳴を訓みてナシと云ふ。て引き上げたたまふ時、其の矛の末より垂り落つる鹽、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能碁呂島なり。淤より以下の四字は音を以るよ。

其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。是に其の妹伊邪那美命に問曰ひたまはく、「汝が身は如何か成れる。」ととひたまへば、「吾が身は、成り成りて成り合はざる處一處あり。」と答白へたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまはく、「我が身は、成り成りて成り餘れる處一處あり。故、此の吾が身の成り餘れる處を以ちて、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さむと以爲ふ。生むこと奈何。」とのりたまへば、生を訓みてウムと云ふ。下は此れに。伊邪那美命、「然善けむ。」と答曰へたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまひしく、「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斗能麻具波比此の七字は音

図表1. 古事記登場順の神名表

No.			
1	天之御中主神		
2	高御産巢日神	①	↑ コトアマツカミ
3	神産巢日神		
4	宇摩志阿斯訶備比古遲神		
5	天之常立神	②	↓ ツカミ
6	国之神立神		
7	豊雲野神		
8	宇比地邇神		
9	須比智邇神		
10	角杵神		ア
11	治杵神		マ
12	意富斗能地神	⑫	ツ
13	大斗乃辨神		カ
14	於母陀流神		ミ
15	阿夜訶志古泥神		
16	伊邪那岐神		
17	伊邪那美神		
18	伊邪那岐命		↑ クニツカミ
19	伊邪那美命		↓
20	大事忍男神		
59	豊宇氣毘売神		

アマノミナカヌシノ
オホミカミ は、
こちら側に重点を
置いた神名。

イザナギノオホミカミ
は、この十柱神に
重点を置いた神名。

天神諸命

それに基づいて
天降った。
あまくだ

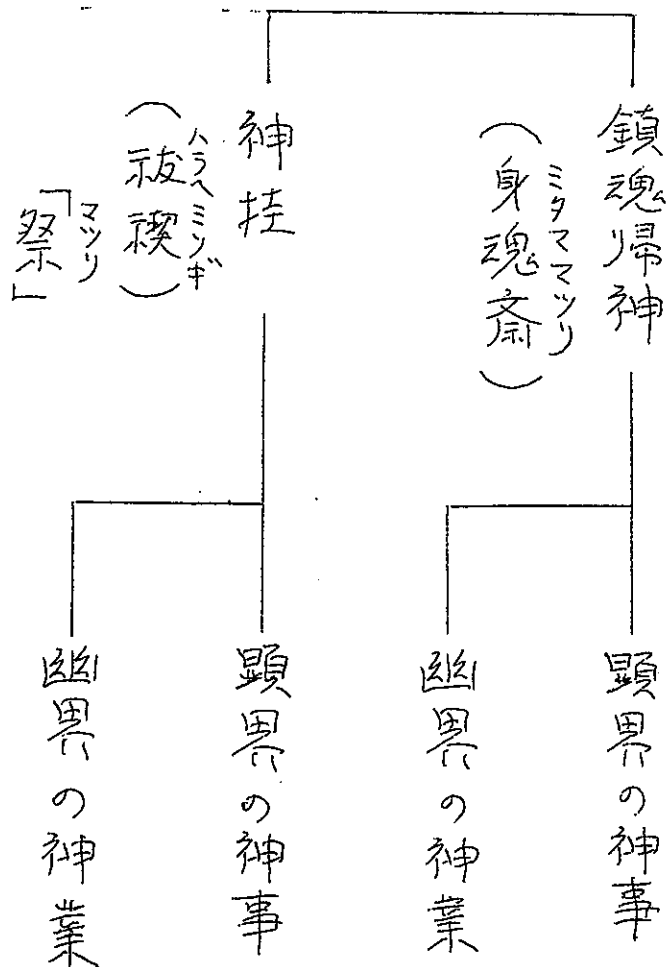
(二柱御祖神)

No. 20~59. の40神は、
「神生み」で生まれた神々。

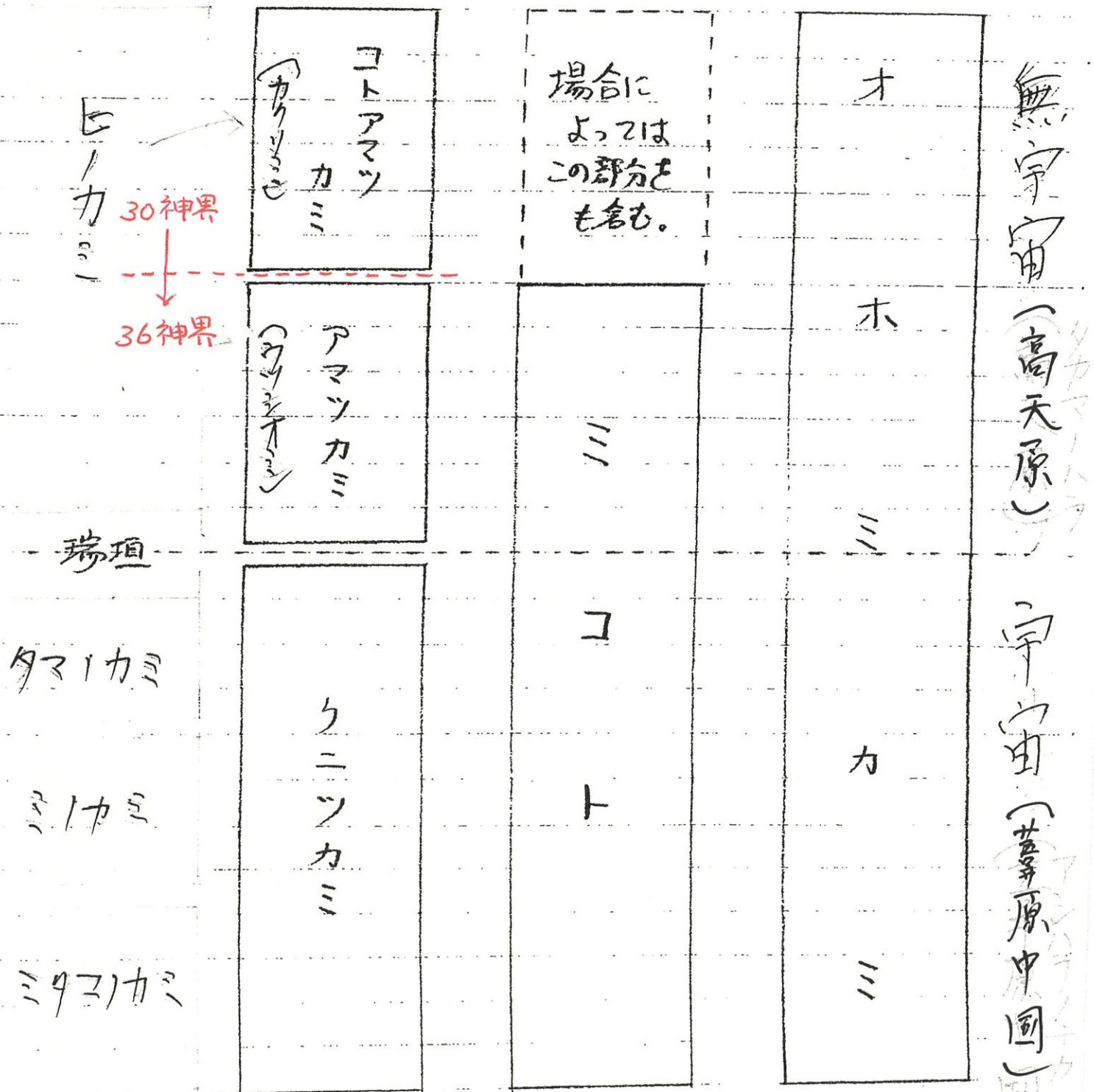
鎮魂帰神とは

身魂齋みたままつりで、遊離ユリの諸魂を招致奉齋して
 高天原を築き日ひと火ひと日ひ若宮わかみやとの宇宙
 を産出し長養して神國たる人類世界と
 成さんとし成すなる禍津日まがつひ・八十禍津
 日ひ・大禍津日おほまがつひ・直靈なほひ・大直靈おほなほひの神事で
 あり、神挂かみかかりとは現身を調伏し濟度し救
 出して白玉身みずかと成して自ら其の白玉身
 裡に白玉樓閣いはさかを築き、之れを磐境いはさかたる
 胎磐なごまつとして鏡かがみとし鏡の船ふねとして極大極
 小の比ひを招祭りて直日なほひ・大直日おほなほひの人と
 成りて生誕するの祓禊はらへみそぎで、天照大御
 神あまのみかがみのみことたる天御鏡あまのかがみ尊みこと誕生の神儀尊容で
 ある

日本民族の信仰 (一)



概念図



1.

2.

無
常
宙

コトアマツカミ
(カウリミ)

アマノカミ
(ウツシオミ)

ミ
ノ
カ
ミ

三
貴
子

瑞垣

宇
宙

ウツツカミ

ツマノカミ

ミノカミ

ミヤノカミ

ミヤノカミ



上半分は一つにまとめる
「天祖・天照大御神」

下半分は三つに分けて
「アマテラス・ツキヨミ・スサノヲ」

神人感孚

多田山谷

川面先生紀念事業會の御様子
拝承。

元來馬場愿治博士の如き川面
学を知らざる者が、川面先生亡
きあとを預るなど言語道断の僭
越にして、稜威會を冒瀆し先師
の徳を穢すものに候。

靈を一（ヒ）とも三（ミ）と
も云ふぞと川面学は教へたれど
も、遺弟中唯一の道統受授者と
称せらるる高橋止観も、嘗て其
の理を聞かず知らずと答へられ
たれば、遺弟一萬之れを知るも
のは無かるべし。

一にして三なりとは、祕事は
祕事なれども説き得ざるものに
はあらず、蓋、知らざりしが為
に説くこと能はざりしのみ。

一即三、三即一なりと云ふが
故に耳に入り難きのみ。

靈なる実体は不一にして不二
にして不三不四にして五なり。

之れを「カミ」と日本民族は
伝承し来れるなり。

古老は之れを図解して・①②
とし「一二三」とも「日経身」
とも教へて中心と外廓との聚散
離合、生死遷流の大道を伝承す
る方便なるのみ。

「五」とは数なれども「イ」
とは言にして「生命（イ）」と
呼ぶ。

「イノチ」にして頭幽一貫と
の義なり。

「イノチ」とは元より死に對
する生にはあらず、神代の神の
神言靈に候。

祖神と主神

「要約」

多田山公遺稿

神ならざる神とは○にして零なる極大極小なれば、總べてにして、計算すること能はざる無なり。

「莫量圓」と古典に載せたる圓なり。

此の圓は「マト」と訓みて「的」「基準」「標識」等の文字言語を充當することを得べく、「高圓（たかまと）」「的形（まとかた）」等の語と等しくして、「閻魔天（やま）」「摩耶（まや）」「聖母（まりや）」等と同義なり。

之れを「親（おや）」とも「祖（おや）」とも「天神（あまつかみ）」とも「天祖（あめのみおや）」とも傳へたる「祖神（みおやのかみ）」なりとなす。

祖神は國を築き神をも生み給ふなれば、神の外なる神なりとは云へるなり。

之れを天御中主大御神（あまのみなかぬしのおほみかみ）とも天照大御神（あまてらすおほみかみ）とも天常立神（あめのとこたちのかみ）とも教へられたれども、日本古典には其の然ることを説示せず。

僅に別天神・獨化之神・獨神・隱身・一神・等の名を記したるのみ。

秘稿『日本天皇国』のまとめ

「コトアマツカミの領域」と「アマツカミの領域」とを二つ合わせて「^{タカマノハラ}高天原」と云う。

両者はともに「無宇宙」だが、「コトアマツカミの領域」は、「宇宙」の存在を前提としていない本来の意味での「無宇宙そのもの」であり、一方、「アマツカミの領域」とは、「宇宙」の存在を前提とした上での、それに^{あいたい}相対する領域としての、より限定された意味での「無宇宙」である。

万葉集の用語としては、前者を^{バクガウエン}「莫囂圓」と、後者を^{バクガウエンリン}「莫囂圓隣」と称する。

神道の用語としては、前者は^{ひのかみのかみみや}「火神宮」であり、後者は^{あまつかみのかみみや}「天津神宮」である。

また、場所によっては、前者を「アマ」と呼び、後者を「アメ」と呼ぶことも可能だろう。

タカマノハラ
ともに高天原

コトアマツカミの領域	アマツカミの領域
バクガウエン ひのかみ かみみや 莫囂圓 火神の神宮 国無きの日^ヒ カガミ (国を産出するの祖) 大宇宙の大中心 天照皇大御神^{ヒノカミ} (火神) 極大極小 (アマ)	バクガウエンリン あまつかみのみや 莫囂圓隣 天津神宮 ヒの国 ミカガミ (カガミノフネ) 宇宙の中心 (人間身では根本魂^{ナホヒ}直日) 天照大御神^{ヒノカミ} (日神) 最大最小 (アメ、天)
「日本民族発祥の神界」も 「日本天皇の祖神」も、実は、 アマツカミ (伊邪那岐命) ではなく コトアマツカミ (天照皇大御神) なのだ、という意味	アマツイハサカ アマツクニ アマツクニタマ 天津盤境 天国 天国魂 ムスビ カミ ミムスビ 産霊の神 皇産霊 有限の (中での) 無限なる世界 万世一系の世界→十二神界 (イザナギ) ヒノワカミヤ (ヤマト)

以上、秘稿「日本天皇国」より抜粋

図表2: 莫囂圓と莫囂圓隣

莫囂圓 コトアマツカミの領域	莫囂圓隣 アマツカミの領域
・人間身にては見聞^{あた}覚知すること 能はざる窮極 (故に、^{もろが}拝みまつることを得ざる神) ・天照大御神出生の高天原 (祖神、天照皇大御神) ・大宇宙の大中心 (「宇宙の中心」にとっての中心)	・人身の知り得たる窮極 (故に、^{もろが}まだしも^{もろが}拝み まつることのできる神) ・築き成したる高天原 (主神、天照大御神) ・宇宙の中心 (大中心が大中心のままに その妙用を^{あら}顕わした結果)

両者はともに高天原であり、総じて無宇宙である。

1. 天之御中主神
2. 高御産巢日神
3. 神産巢日神
4. 宇摩志阿斯訶備比古遲神
5. 天之常立神
6. 国之常立神
7. 豊雲野神

コトアマツカミの領域

莫囂圓

同じオホミカミでも、
「スリカタナス」の機能に
着目すると、この神は
イザナギノオホミカミとな。
(コトアマツカミとしても、アマツカミ
としても、クニツカミとしても機能)

8. 宇比遲邇神
9. 妹須比智邇神
10. 角杙神
11. 妹活杙神
12. 意富斗能地神
13. 妹意富斗乃辨神
14. 淤母陀琉神
15. 妹阿夜訶志古泥神
16. 伊邪那岐神
17. 伊邪那美神

中核

十柱神
伊邪那岐
伊邪那美
大御神

内容

ハ神はニ神の内容でニ神としてはイザナギノオホミカミ

莫囂圓隣

アマツカミの領域



無宇宙

天神
諸命

アマツカミをクニツカミにする
コトアマツカミのオホセのこと

瑞垣

古事記では

伊邪那岐命

伊邪那美命

となる

アマツカミであると同時にクニツカミでもある → 命とよぶ

クニツカミの領域

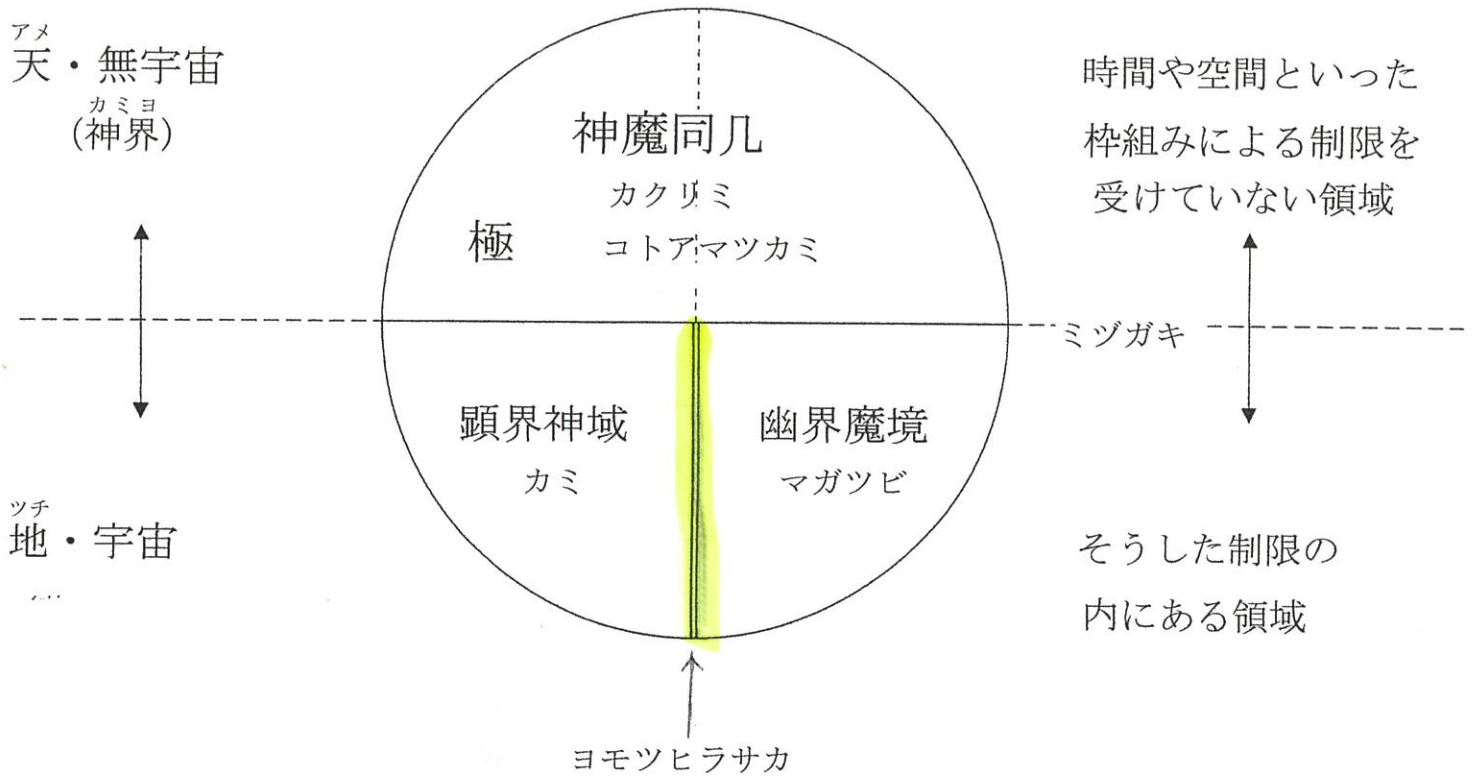
宇宙
(国)

古典では

「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」と記されているが、
「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と奉称されなければならない。
(多田流)

アマツチ
天地概略図

アメとツチを合せて、大宇宙と称する



この二項対立の図式は^{ツチ}地の側でのみ有効

^{アメ}天の側には及ばない

^{アメ}天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

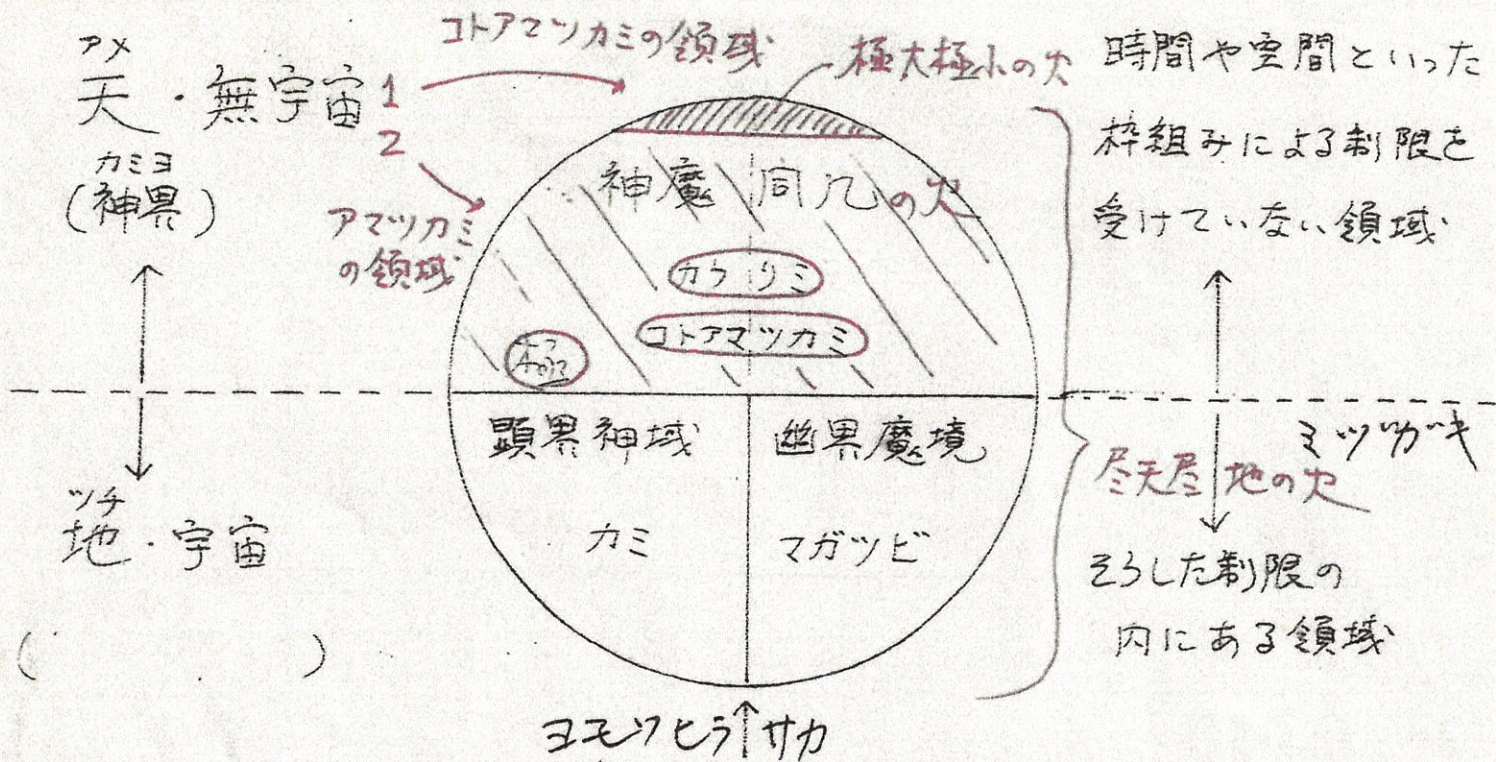
という時の「ア」の領域

^{アメ}天とは、物理的に言えば、宇宙創世以前の領域

アノケ

天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。



この二項対立の図式は、^{ツチ}地の側でのみ有効。

^{アメ}天の側には及ばない。

アメ

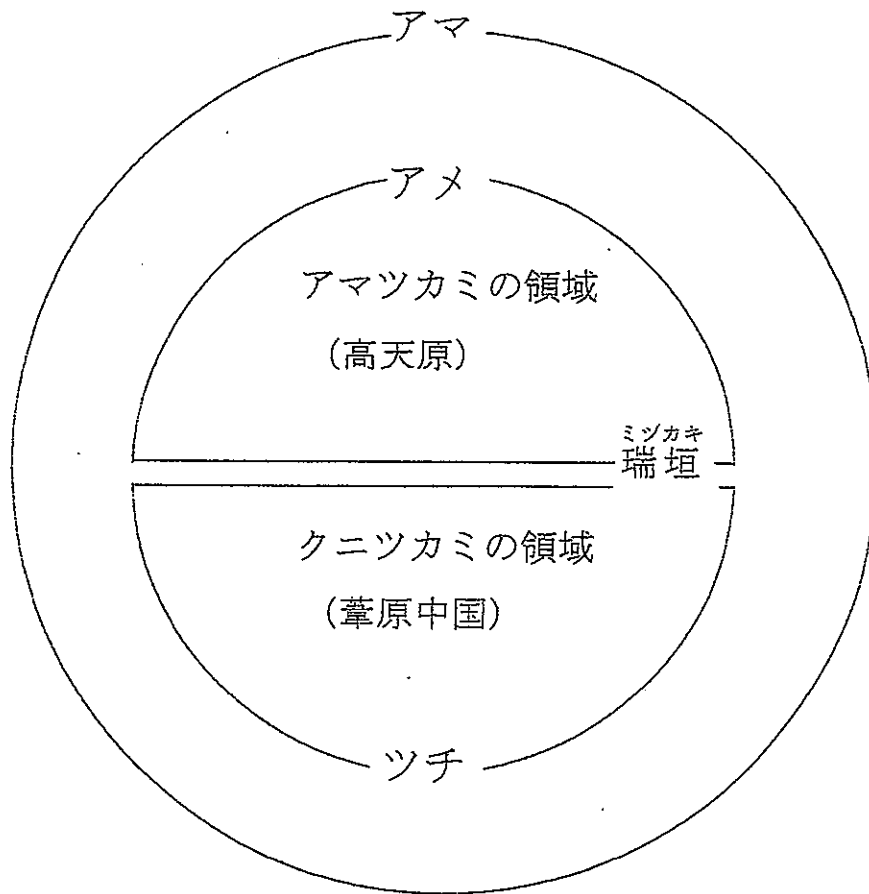
天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域。

“ 物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域。

アマツテ
 天地概略図 第二版 (あくまでも概略)

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



○「高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の中津国) と幽界魔境 (マガツビの領域、黄泉国) とに分かれている。

(第一版を参照)

極 = 神魔同凡の㊦

即

根本資料

直日

(禊) カムロキ
カタメナス

顕界神域
ナカツウニ

生

箇体

ミマ
シロ

スリ

死

資料

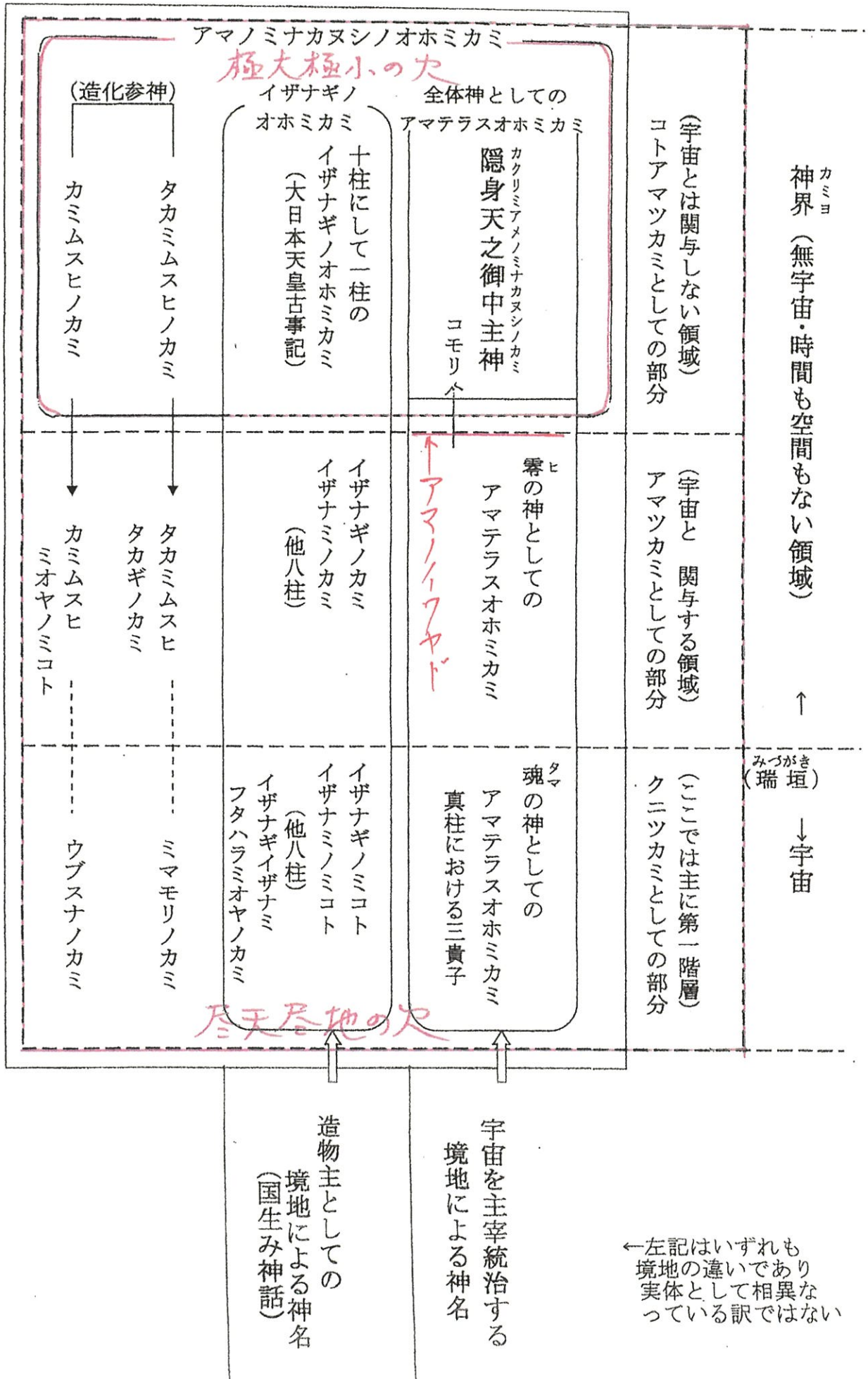
カムロミ (禊)
スリ

幽界魔境
ヨモツウニ

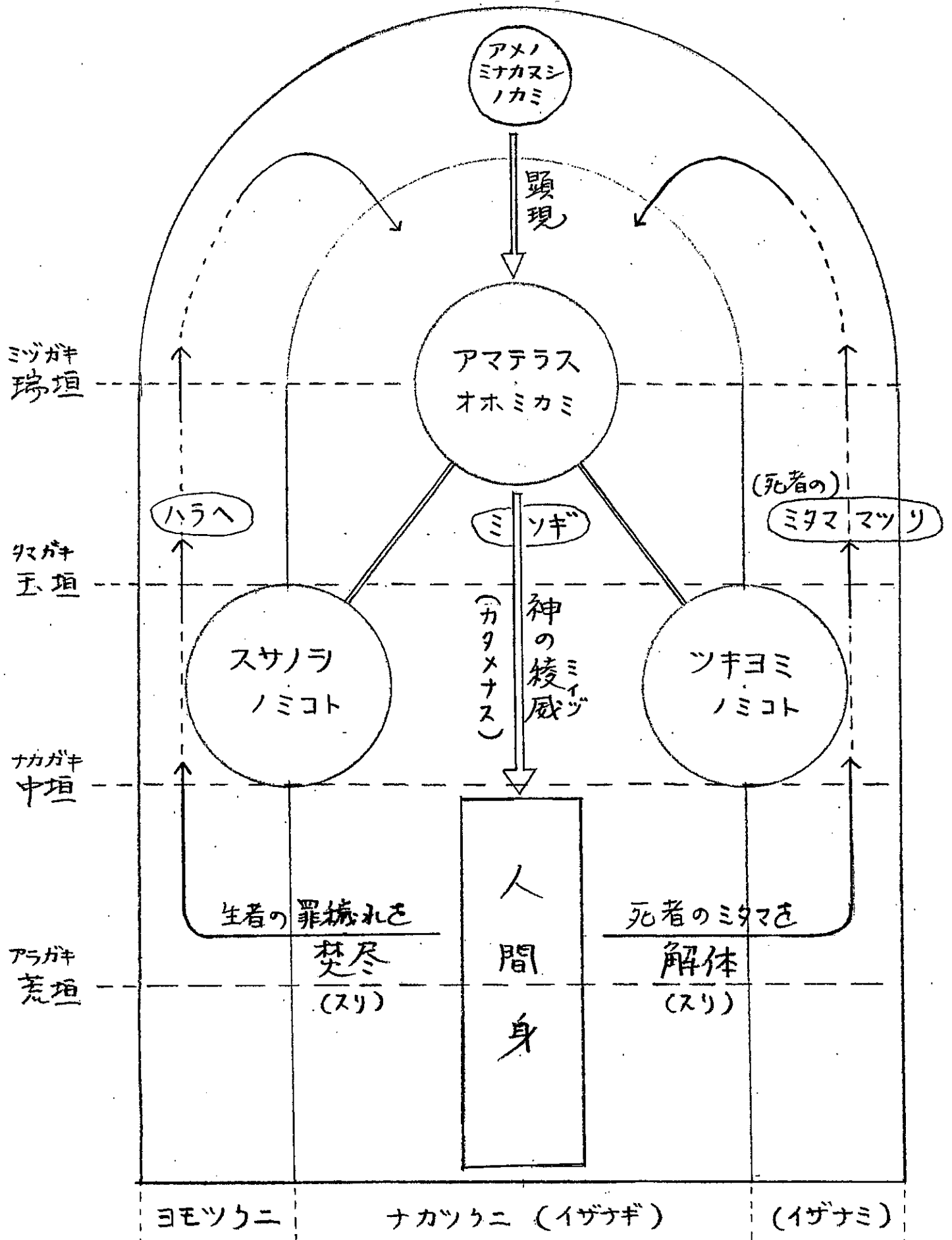
ヨモツヒラサカ

オホミカミ (全体神) の一覽
(タカマノハラの構造)

多田流 オホミカミ (一) (二)



付図4：ミコトとしての基本形 (加筆版)
その1.



白玉の、眞玉勾玉、眞つぶさに、統一る御魂。天なるや、御中の神と、神知らすなる。

怪奇異靈の神魔殿。神魔本來非神非魔。古老は、之を教へて、「神魔同凡の天御鏡」なるぞと云はれたのである。過去を被ひ、また過去を被ひ、被ひ被ひても、人間身天降の時が判らず、天地の判別がつかず、自己本來何物であるかに徹し得ないとすれば、また更に、火之迦具土ホノカグツチの神徳を仰ぎて、幽界魔境に入るのである。

その幽界魔境とは、伊邪那美神の黄泉國なので、八種雷の荒び狂ひ、黄泉醜女の亂れ騒げる斯許米伎シコノキ繁國である。此の國に入るものは、何如なる罪障宿業も焚き盡されて、速佐須良比咩ハヤサスラヒメの「ミマモリ」を得るから、此の身此のまま、此の土此のまま、此の時此のまま、一圓光明の妙相妙用を現ずるので、過去にあらざ將來にあらざ、現在にあらざるの過今來を明らめ得るので、此の土此のまま「鏡の船」で、此の身此のまま「神の身」で、此の時此のまま「神の代」で、「○神・○魔」ヒシン・ヒマ。是の如くに往き是の如くに來る。

此のやうな被。その被の結果を、延喜式の祝詞には、「高山の末短山の末より、さくなだりに、落ちたぎつ速川の瀬に坐す、瀬織都比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。此く持ち出で往なば、荒鹽の、鹽の八百道の、八鹽路の、潮の八百會に坐す、速開都比咩と云ふ神、持ち可吞みてむ。此く可吞みてば、氣吹戸に坐す、氣吹戸主と云ふ神、根の國、底の國に、氣吹放ちてむ。此く氣吹放ちてば、根の國、底の國に坐す、速佐須良比咩と云ふ神、持ち佐須良比失ひてむ」とて、四段の被を教へ、「今日よりはじめて、天地の在りのことごと、罪と云ふ罪は有らじ」と云へるもの。上天下地唯見る稜威の赫灼たるのみである。

是の如くに往き、是の如くに來る、神魔同凡の火は、東西古典の傳燈で、何處何如なる民族も、古より今に到るまで、仰ぎ來り褒め讃へて止まざる唯一無二盡天盡地の○であるから、○神とも○魔とも呼ぶ。神ならざるの

神で、魔ならざるの魔で、「ヒ」と稱へまつるのほかはない。先師は、稜威會の宣言書に此う書いてある。「いかに其の信仰解釋實行の形式に於て文野高卑の別あればとて、一として邪道のみのもなく、魔法のみのもなく、均しく是れ根本大本體の天照なり、發顯なり。天照發顯としての一大活躍態なり。正邪一道、神魔一體、或は正となり、或は邪となり、或は魔、或は神たりつつあるに過ぎず。奚ぞ矧んや、其の正なるもの未必しも正ならず、其の邪なるもの未必しも邪ならず、魔、魔にあらず、神、神にあらずるものあるに於てをや」と。それから、教典捧讀の注意書には、「夫れ球體に於ける内容の中心は、唯一不二にして絶対無比に候ぞ。内容の中心より表はれたる輪廓の中心は、到る處に存在し居る者に候ぞ。内容に於ける中央の中心は、其の周圍十表に於ける群中心を一貫統一し居る有様を見よ。是れ宇宙の中心が延長して、宇宙と成り、其の宇宙には、分分微微に、中心のあることを證明したものである。中心より出づるものは中心なるからである」と記されてある。さうして、また別に、「零即一」とか、「無經無緯の高玉座」とか白されて、此の「ヒ」を稱へて居る。

此のやうな「ヒ」の結び結びたる人天萬類であるから、善惡美醜是非曲直と、まるで反對なことを思ひもすれば行ひもする。種種様様と數限りも無いことを、肯定もすれば否定もする。一見何とも複雑至極である。

此のやうな中に、其のやうに生活しつつある人天萬類は、常に怒濤狂瀾の有様で、黑風暴雨の状態で、一日一時とても晏如たることを許されない。で、人人は間斷無く神音を稱へつつ、靜寧和平の神國樂園を築くやうに心掛けねばならぬ。

自己として築き成したる神國樂園は、何如に狭くとも小さくとも、國津神輪なので、天津神の詔せのままに、天沼矛の神事に隨順し得たので、聊なりとも神命に應へまつることを得たるもので、「産土神」と祀らるるのである。

「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」
ハラヘコトバ

マキリツドヘル ヒトビト クニツチヤマカハ クサモキモ ソラユククモモ ツチクグルムシモ アメツチノアリノコトゴト ケフノハラヘノミマツリニ オノモオノモガ
参集 閑留 人人。 国土山河。 草木。 空行雲毛。 地潜虫毛。 天地乃在乃尽。 今日乃祓乃御祭爾。 各自各自我。
アヤマテオカシケム クサグサノトガトイフトガ ツミトイフツミノ アカトケガレトヨ ハラヘヤラヘキヨメタマフ カミノカミワザ カミコトタマフ ツツシミカシコミヲロガミマセ
過 犯 計 牟。 雑 雑 乃 尤 云 尤。 罪 云 罪 乃。 垢 斗 穢 斗 乎。 祓 却 閑 清 給 布。 神 乃 御 惠。 神 言 靈 乎。 敬 美 畏 美 拜 美 坐 勢
ト マラス 斗 白 須。 *自分の意識が宇宙の側にある状態から始まる。*

伊宇袁衣耶。
イハスエ

宇斗乃宮。 宮斯呂築成住我乎。 神乃我叙斗。 神知須邇邇。 神乃神輪叙テルニテリタル晃耀赫灼矣。

阿知米。

阿知米。 *自分の意識が無宇宙の側にあるものとして始まる。*

阿宇袁衣耶。 宇。 宇。 宇。 宇。 斗。 宇斗。 宇。

カク ウシナヒテバ アメツチノアリノコトゴト ケフヨリハジメテ ツミトイフツミハアラジト ハラヘヤラヘタマフコトノタフトサヲ カシコミカシコミテ ヲロガ
如此久失氏婆。 人天万類尽天尽地。 今日以降。 罪止云布罪波不在止。 祓却給事乃尊乎。 恐美惶美且。 奉

ミマツリ キヤマヒマツリ マツリマツルトマラシマツル アマテラスオホミカミ カムロギノミコト カムロミノミコト タケハヤスサノヲノミコト オホミナハタタヘマツリテ アメノ
拜。 奉感謝。 奉 祭止奉白留。 天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命止。 大御名波奉称且。 天

ミオヤアメツルヒノアノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト カシコシ
祖天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊。 畏。」

無宇宙の「零」と宇宙の「空零」

まず「大宇宙」は「無宇宙」と「宇宙」とに分かれる。

即ち、「結ばれざると」と「結ばれたるミ」である。

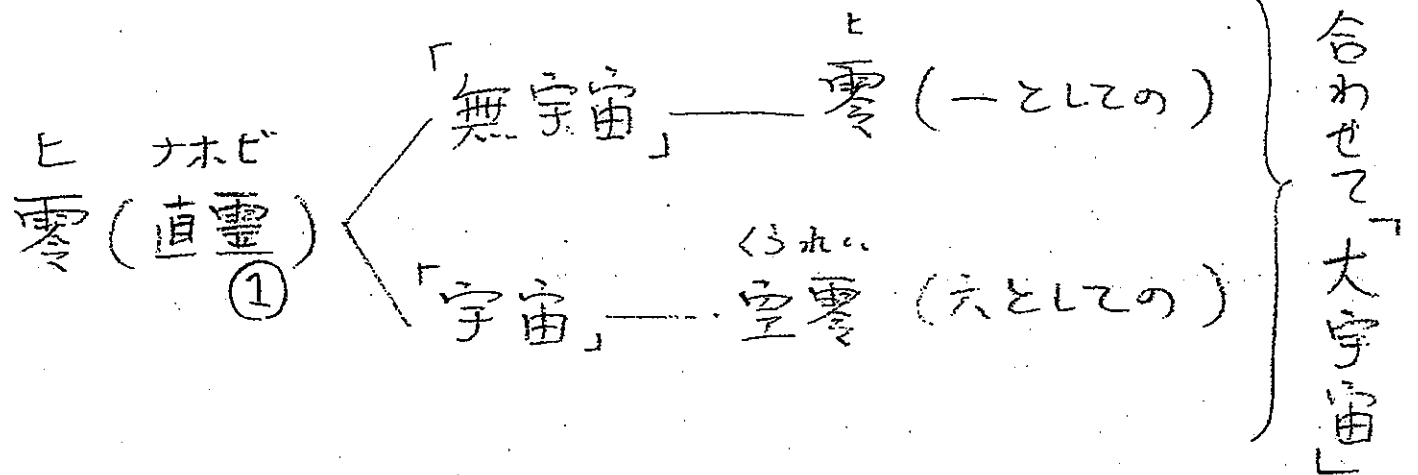
「宇宙(國)」全体を、統一体としては「全宇宙」とも称する。

単に「宇宙」とだけ言った時には、しばしば、「全宇宙」の構成要素である個々の「箇体(小宇宙)」を意味しているのて、注意が必要である。

また、数理としては、「無宇宙」の側にある「零」は「一としての零」であり、「宇宙(全宇宙)」の側にある「零」は「六としての零」である。実体としては同じ「零」なのだが、「箇体(小宇宙、数理としては五)」が成立する以前の「零」が、その後の「零」がの違いである。

前者は「箇体」の成立に際して「中心」となり得るが、後者はもう「中心」とはなり得ない。他の「箇体」に「外郭」として組み込まれるだけの存在であり、

「空零」と称される。



「宇宙」

統一体としては「全宇宙」

個々の「箇体」を指しては「小宇宙」

- ナホヒ
直靈 ① ヒの段階のナホヒ 零そのもの
- 直靈 ② ビの段階のナホヒ
- 結ぶ止めたる靈 即ち魂 ヒ

実のところ、^{じやくれい}「直霊」と書いて「ナホビ」と読む用語は、『言霊の率』

には意外なほど用例が少ないのだが、かろうじて 111 頁には

『^{モユルヒ}燎火とは^{ナホビ}直霊にして』という説明文がある。

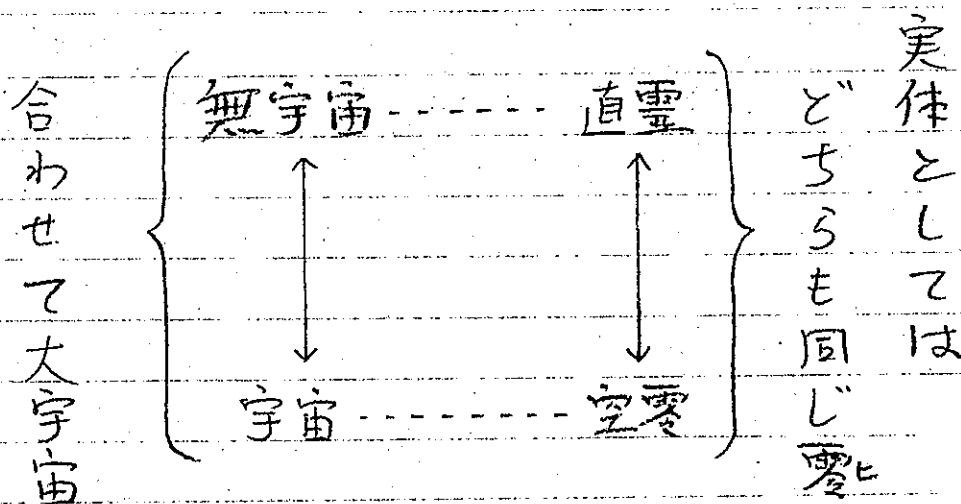
(同頁の『^{ヒサメ}霏霖』については、解答七を参照)

ここから考えるに、^{ナホビ}「直霊」とは「無宇宙の側」にあって、また

結ばれてはいない^ヒ零」を指す用語である。

よって、宇宙の側にある「空零」と対比させた。この表現には、

特に問題は無いものと思われる。



また、^{ぢやくび}「直毘」と書いて「ナホビ」と読む用語もあるが、

幸89頁の表現を見る限り、これは（場合によっては）

「^{ナホビ}直霊」と全く同じ意味に用いても構わない用語である。

但し、幸70頁には『神とは、^{マガツヒ}禍津日と^{ナホビ}直毘の相対である』

という表現があるのだが、この意味では常に^{ぢやくび}「直毘」の語
だけが用いられている。

察するに、^{ぢやくび}「直毘」のちは「燃ゆる火」の状態に限らず、

その火が結ばれた状態などを、より広く表現できる用語で

ある、ということなのだろう。

^{ナホヒ}

また、「直日」とは人間にとっての中心、即ち「根本魂」であり、

^{ナホビ}

「燃ゆる火」としての「直霊」が結ばれて出来た実体である。

^{ナホヒ}^{ナホビ}^{にふしん}^{かしん}

「直日」と「直霊」の関係は、「日神」と「火神」の関係、もしくは、

「中心」と「外郭」の関係に等しいと言って良い。

^{ナホヒ}^{ナホビ}

従って、未来74頁の『直日の成り成り直霊の成りませる』という

^{たぐい}

表現も、単なる対句であって、因果関係の類ではない。

『中心も完成し、かつまた、外郭も完成した』という程度の

意味に解釈しておくべきであろう。

^{また、}

(^{マガツヒ} ^{マガツビ}
幸46頁には、「禍津日」と「禍津毘」の意味の違いについて

^{ナホヒ}^{ナホビ}

書かれているが、「直日」と「直毘」の意味の違いは、これとは

全く異なるので、注意を要する。先に述べた幸70頁にもある

^{ナホビ}^{マガツヒ}

とおり、「直毘」は「禍津毘」よりも、むしろ「禍津日」の方と

^フ

対を成す用語である。)

2020.9.1.

ナホビ

直霊

無宇宙にある素材としての零

(上)の段階にあるものまで含めて言う。

ナホビ

直霊

ナホビ

直霊

の神 本来の神

「素材としての直霊」とは、区別される。

普通は (下)の段階にあるアマツカミである。

高津日神

「それ自身がマガツヒである神」ではなく、

「マガツヒを統率するところのヒノカミ」のこと。

ナホヒ^{くうれい}
直霊と空零

① 根本資料 → 組み合わせる → 構造体 ②

無宇宙

ナホヒ^ヒ
直霊
(零)

ムスビムスビ
産霊産魂

ヒノカミ

日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

ナホヒ
根本魂・直日
(箇体の中心)

流出 (イザナミ)

統率

統率

(アマテラス) ----- (左に 神習て)

ミヅガキ
瑞垣

宇宙

空零
ヒ
(零)

神話では
ヒルコ

国生み
(イザナギ)

十四島・三十五神

マカツビ②

カミ
神に帰順したる妖魔

死後、解体される。
(ツキヨミ) (上位の身魂・外郭)

調伏 (スサノヲ)

マカツビノムシ
妖魔群 1

生前、罪や穢れを祓われる。
(スサノヲ) (肉体身、など)

マカツビ①

(ヨモツヒラサカ)

素材領域

宇宙では、ヨモツクニ
(イザナミ)

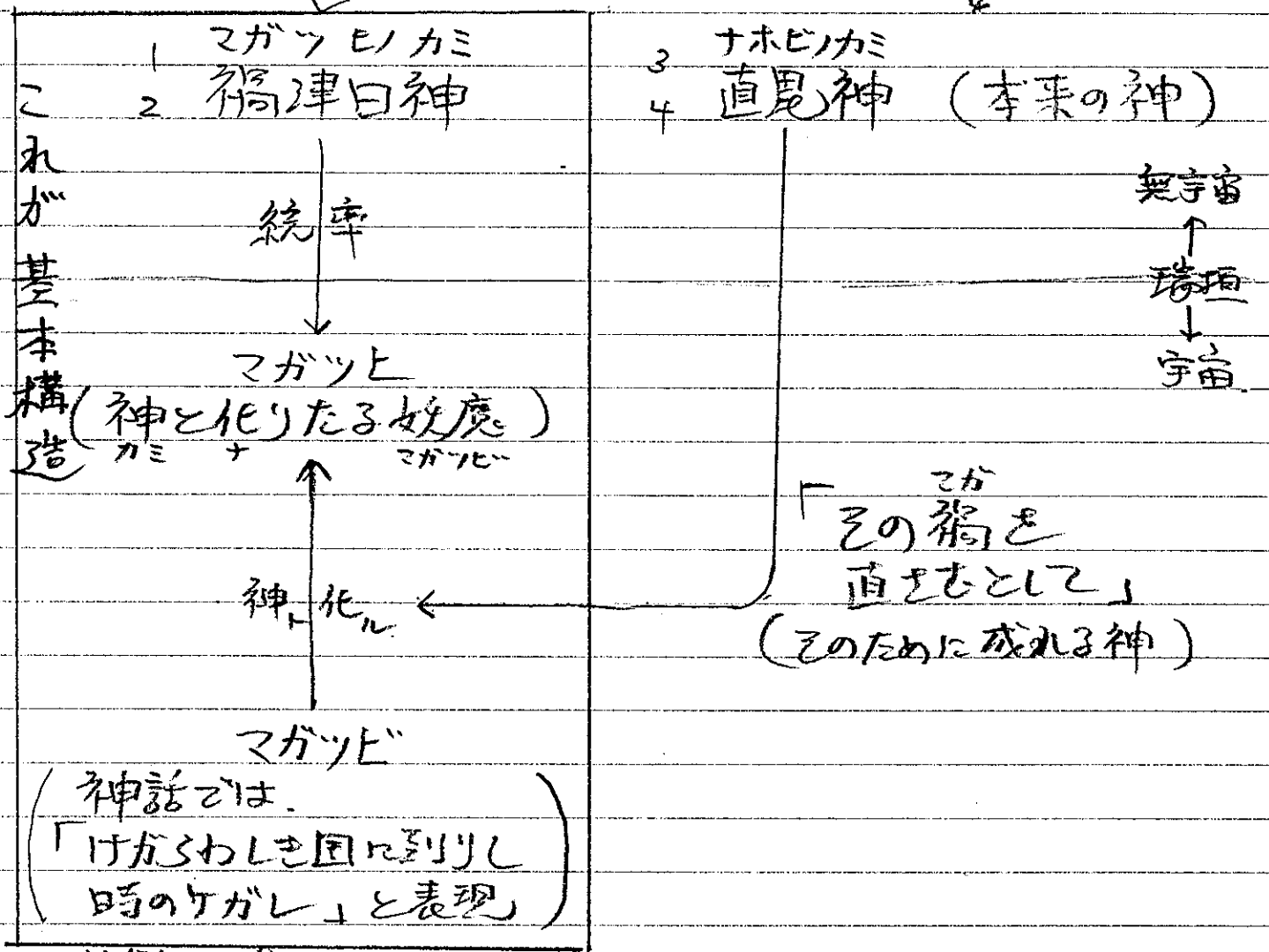
箇体領域

宇宙では、ナカツクニ
(イザナギ)

(幸83では、イザナギのたに化神(化身))

(分掌神 2/9)

付表No.

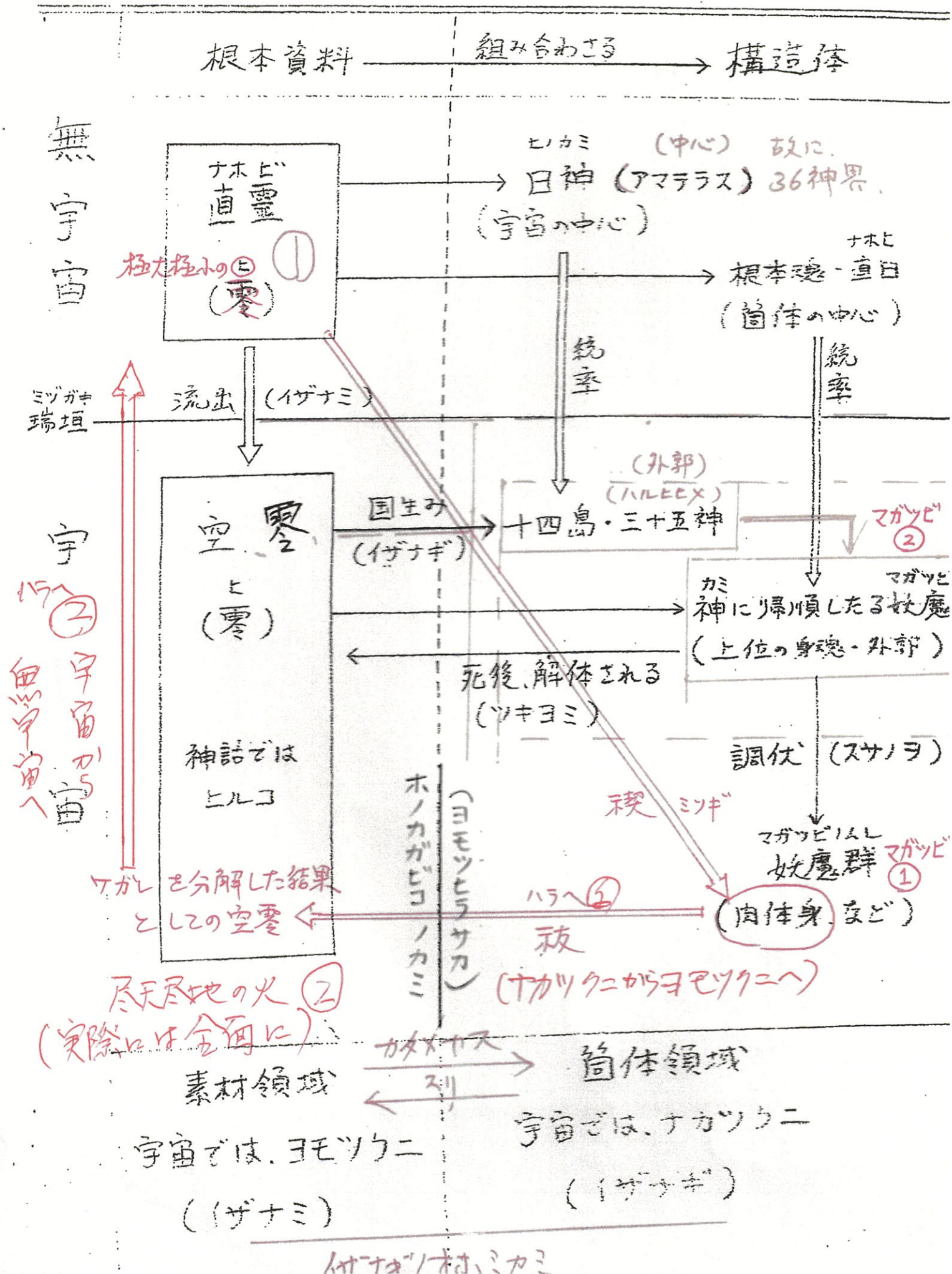


けがれ よ
「汚垢に因りて」は、「ケガレをマガツヒに変えて
統率せんがために」ぐうの意味

付表 オホミマノハラヘ
御身之禊によりて成りませる 十四神 一覧 言霊の幸 66頁より

番号	神名	集合名	その内容
1	ヤソマガツヒノカミ 八十禍津日神	ワガレ 黄泉国の穢に因りて	カミ ナ マガツヒ
2	オホマガツヒノカミ 大禍津日神	成りませるニ柱	神と化りたる妖魔
3	カムナホビノカミ 神直毘神	マガ 其の禍を直さんとして	
4	オホナホビノカミ 大直毘神	成りませる三柱	//
5	イヅノメノカミ 伊豆能売神		
6	ソコツワタツミノカミ 底津綿津見神		イザナギノオホミカミ
8	ナカツ 中津 //	三柱の綿津見神	伊邪那岐大神神の 気吹の狭霧
10	ウハツ 上津 //		イヅチ ケギリ
7	ソコツツノヲノミコト 底筒之男命		
9	ナカツ 中 //	スミノエ オホカミ 墨江の三前の大神	//
11	ウハツ 上 //		
12	アマテラスオホミカミ 天照大神		
13	ツキヨミノミコト 月読命	ミハシラノウヅノミコ 三貴子	ヒ 尽天尽地の丈としての 伊邪那岐命
14	タケハヤスサノヲノミコト 建速須佐之男命		イザナギノミコト

修理田氏の機能図 直霊と空零



捨身シヤシンなるかな。捨身シヤシンなるかな。

神魔同凡の意味

佛徒も、大死の語を用ゆ。基督は、十字架上に、身を以つて、十字の神傳を垂示ヲシへ給ひ、悉達多太子は、妻子、眷屬、領土、財産、七珍萬寶の空なるを證して、尼連禪河の悟證サトリを得たまへり。

竺紫の日向の橘の小門の憶原の御身オホミモノハラヘ之禊は、白すも畏し。

まことに、此の身は、虛天オホミソラに挂れる、天狹霧で、國狹霧で、「かみ」で、「まがつび」で、「生」で、「死」で、

「我」で、「彼」で、「變轉出沒」で、「如是コレコトホリ」である。

古典に、「中瀬に降り迦豆カヅキ伎て、滌ぎたまふ時に、成りませる神は、八十禍津日神。次ぎには、大禍津日神オホマガツビノカミ」

と記されたのは、伊邪那岐神が、黃泉國の污垢ケガレを洗はれた爲に其の污垢が、伊邪那岐神より離れて、虛天オホミソラに獨立體スガタを顯はしたので、其の獨立體ヒトツノカミを、「直さんとして成りませる神は、神直カムナホビノカミ毘神。大直オホナホビノカミ毘神、伊豆能賣神イツノメノカミ。」と教へ

である。之に依つて、神とは、禍津日マガツビと直ナホビ毘との相對であることを確證されるのである。之を、「神魔同凡」と呼ぶべきである。

此の、相對の「神カミ」は、相對のままに、絶對の「日ヒカリ」である。そのことを、上來繰り返して述べたのではあるが、不幸にして、筆、意ココロを傳へず、意ココロ、また、神カミを傳へざるの憾が多い。

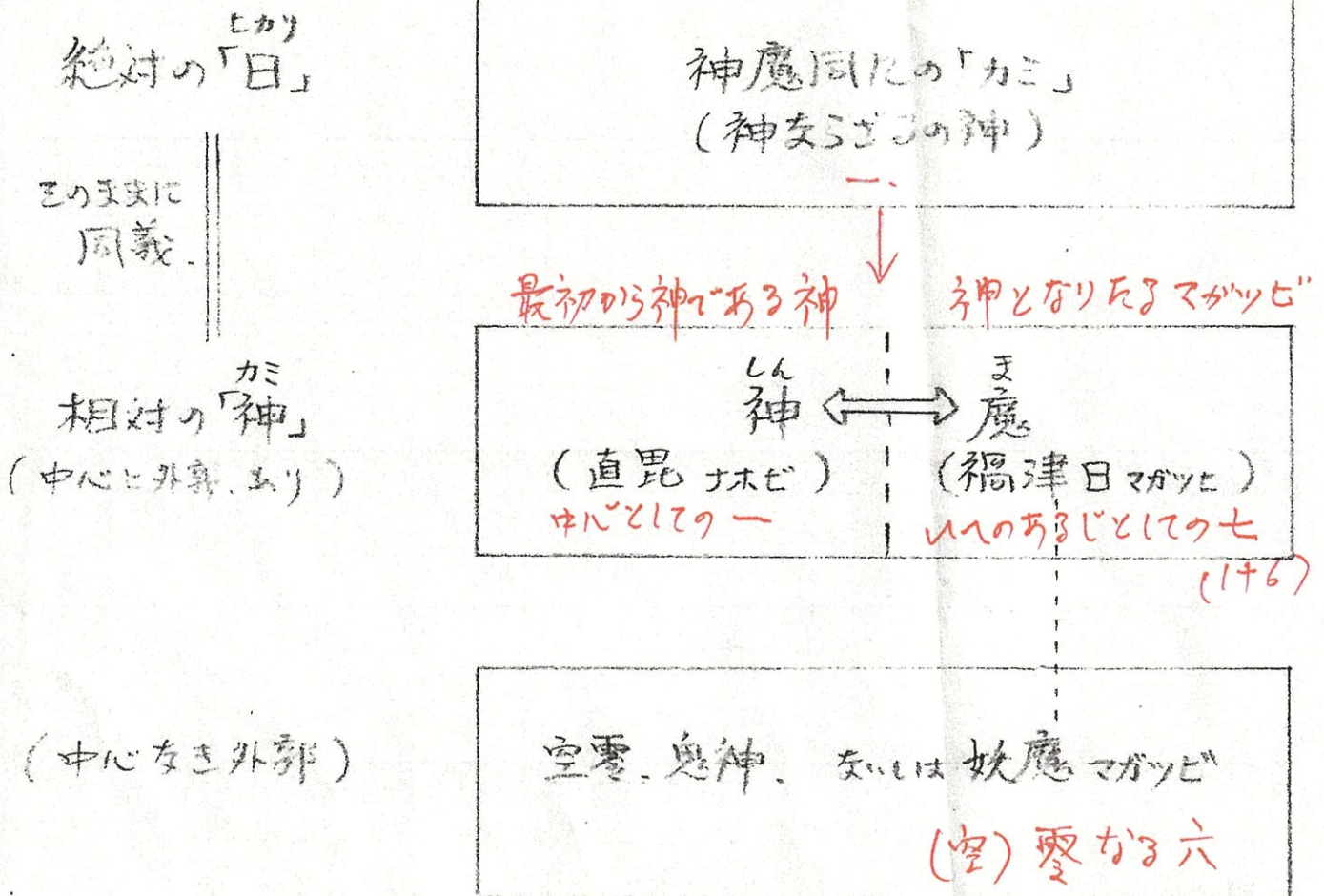
あなあはれ、うめの立枝は、にほへども、杉木立して、晝としもなき。

『人身孰れよりか來る。』

『死者何處にか往く。』

幸. 70頁の解説、

「神」という用語は、文脈によってさまざまな意味範囲で用いられてしまうので、解りにくい。この文脈では下記のとおり。



神国成の機能図 直霊と空零

無
宇
宙

宇

宙

根本資料

組み合わせる

→ 構造体

ナホヒ
直霊
ヒ
(零)

ヒノカミ

→ 日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

ナホヒ

→ 根本魂 (直日)
(直体の中心)

素材の形成

統率

統率

流出 (イザナミ)

ツガキ
常垣

空零
ヒ
(零)

神話では
ヒルコ

国生み (イザナギ) → 十四島・三十五神

素材の形成

→ 神に帰順したる妖魔
(上位の身魂・外部)

死後、解体される
(ツキヨミ)

調伏 (スサノヲ)

マカツビムシ
妖魔群

(肉体身・など)

生者の (直日) は
肉体身の中に在る。

月夜見
月
の
力
の
解
作
用

素材領域

直体領域

宇宙では、ヨモツクニ
(イザナミ)

宇宙では、ナカツクニ
(イザナギ)

人間身においては、

直日 (本来の神)

サキタマ・タシタマ (神に帰順した子でガツビ) → でガツビ

でガツビ②

アラタマ・マシタマ (まだ充分には神に帰順
してないでガツビ)

でガツビ①